

3大学合同卒業論文発表会(英語学・英語教育)

三重大学(西村ゼミ・中川ゼミ)

南山大学(今井ゼミ)

名古屋市立大学(日木ゼミ)

英語学・英語教育に関する、3大学合同卒業論文発表会を以下の通り Zoom で開催します。
興味のある方は参加してください。(部分参加も大歓迎です。)

日時: 2021 年 2 月 14 日(日曜日)

発表会: 午前の部 9:00~12:00 午後の部~13:00~15:20

交流会: 15:30~16:00 頃

Zoom:

トピック: 3 大学合同卒論発表会

時間: 2021 年 2 月 14 日 09:00 AM

Zoom ミーティングに参加する

<https://us02web.zoom.us/j/85254511810>

ミーティング ID: 852 5451 1810

パスコード: 451030

問い合わせ先: 名古屋市立大学人文社会学部 日木 満 (ひき みつる)

研究室 Tel. 052-872-5824

メール: hiki@hum.nagoya-cu.ac.jp

お願い:

(1) Zoom 入室の際の「名前」は以下のようにお願いします。

大学生: ○○大学○年氏名 (例: 名市大 4 年 日木満)

高校生: ○○高校○年氏名 (例: 鈴鹿高校 3 年 日木満)




教員: ○○大学/高校/中学教員 氏名 (例: 名市大教員 日木満)

その他: (例1: 一般 日木満 例2: 日木ゼミ卒業生 日木満)

(2) 学生の発表を聞かれた方は、是非、その学生への感想等を Google フォームで送ってください。Google フォームへは下記プログラム内の URL か QR コードにアクセスして下さい。(教員、一般の方は「学年」欄は記入不要です。)

プログラム

時間	発表番号	氏名(ゼミ)	タイトル コメント用 URL	QRコード
9:00	はじめに			
9:05	発表 1	榎本 愛生 (日木ゼミ)	「～して(いる/・・・する)の in 前置詞句と類訳表現の考察 — [in + vN] vs. [V-ing], [adjly], [vV and] — https://forms.gle/kwJM3z8QnGFiaSqU9	
9:20	発表 2	北沢 瑛 (日木ゼミ)	コミック『ピーナツ』にみる THIS/THAT の世界 見かけ上の「話者の近くにあるモノを指す THAT」「話者から離れたモノを指す THIS」について https://forms.gle/EBqyMk2EYJRBobfk7	
9:35	発表 3	稲垣 亜美 (日木ゼミ)	基本動詞(GIVE/TAKE/MAKE)のコアイメージ再考 — 第2のコアから根源的イメージへの展開— https://forms.gle/ENXSbuJpCSzND6s9	
9:50	休憩(5分)			
9:55	発表 4	大谷 綾佑 (日木ゼミ)	[感情形容詞 + to 不定詞]における動詞のアスペクト解釈のメカニズム https://forms.gle/cBQJD9YSW16HSX6E7	
10:10	発表 5	大山 巧成 (日木ゼミ)	接続詞の用法イメージの図式化 when, but, while, as https://forms.gle/Y1vzki7Wo8ntndvW8	
10:25	発表 6	片山 裕揮 (日木ゼミ)	「B の A」の英訳 — 「ベニスの商人」と「パリのアメリカ人」— https://forms.gle/D9XfmEBRFY6fDABX6	
10:40	休憩(10分)			
10:50	発表 7	田中 美穂 (日木ゼミ)	be 動詞+α の意味を持つ動詞 — イメージの違いで選ぶ LIE 系, REMAIN 系, SEEM 系 — https://forms.gle/gGxovUPrp9HKC79QA	
11:05	発表 8	寺尾 優里 (日木ゼミ)	know を使い切る為の語法研究 ～「know=知っている」を超えて～ https://forms.gle/M1Zj46XGpX8Gtinb6	
11:20	発表 9	湊 真穂 (日木ゼミ)	副詞的に訳してしまう 3 表現の研究: 「素直な-ly 副詞」、「副詞的 at 前置詞句」、「非副詞的 in 前置詞句」 https://forms.gle/2kDoqjRHtuozJuuy7	
11:35	午前の部 ディスカッション・コメント(25分)			
12:00	お昼休み			
13:00	発表 10	筒木康亮 (西村ゼミ)	A Study of Polite Expressions in English https://forms.gle/4MAcTN2P9hp4riM99	
13:15	発表 11	稲葉莉子 (西村ゼミ)	A Study of Gerundive and Infinitival Constructions https://forms.gle/vqnKtvkn6dCuiFRa9	
13:30	発表 12	加納 滯 (西村ゼミ)	A Study of Participial Constructions https://forms.gle/oxqHmjh2QsUzvn5n6	
13:45	発表 13	矢野元生 (西村ゼミ)	A Study of Phrasal Verbs in English https://forms.gle/6cvYo7gYUdsP9GgW9	

14:00	休憩(10分)			
14:10	発表 14	井上 晋作 (中川ゼミ)	How to Teach English at Elementary School from a Viewpoint of Cross Curriculum Learning https://forms.gle/yHa258P9QBBaoMPN8	
14:25	発表 15	下里あおい (中川ゼミ)	A Method of Teaching English Word Order at Elementary School with Special Focus on SVO Construction https://forms.gle/2feHRyX425JN5MeN8	
14:40	発表 16	西口 詩乃 (中川ゼミ)	A Study of Teaching Words in English Using Audio Visual Materials at Elementary School https://forms.gle/MWGGN3VhzJ4aPhHU9	
14:55	午後の部 ディスカッション・コメント(25分)			
15:20	発表会終了・休憩 (Breakout Session 準備)			
15:30	交流会(Breakout Session) 16:00 頃終了			

要旨

発表 1 (9:05~)

「～している/...する」の in 前置詞句と類訳表現の考察 —[in vN] vs.[V-ing], [adjly], [vV and]— 榎本 愛生 (名市大・日木ゼミ)

①「電車が動いている。」②「彼は抗議して辞職した。」を英語でどう表現するか。筆者なら迷わず、“The train is moving.” “He protested and resigned.”と表現してしまう。しかし、①②はそれぞれ、“The train is in motion.” “He resigned in protest.”のように、[in vN(=動詞的な要素を持つ名詞)]を用いて表現される場合が往々にしてある。なぜ筆者は、①②のような「～している」や「～して...する」を英語で表現する際、[in vN]を使うことができないのか。本稿は、英語学習者が意図的に[in vN]を使えるようになるために、以下の3点を明らかにして、[in vN]の全体像を提示することを目的としている。

1. [in vN]が使えない原因
2. [in vN]の文法事項([in vN]の種類や使われる構文)
3. 「～している/...する」の[in vN]と類訳表現[V-ing], [adjly], [vV and]の意味の違い

考察の結果、1.について、[in vN]が使えない原因は「～している/...する」対[in vN]と[V-ing], [adjly], [vV and]の、筆者の偏った認識であることがわかった。2.について、[in vN]の4種類と使われる構文4種類を提示した。3.について、「対応する疑問文」と「Predicate(述部)の数」に基づいて、それぞれの表現の違いと相関関係を図式化して提示した。

発表 2 (9:20~)

コミック『ピーナッツ』にみる THIS/THAT の世界 見かけ上「話者の近くにある物を指す THAT」「話者から離れた物を指す THIS」について 北沢 瑛 (名市大・日木ゼミ)

英語の指示表現 this や that がそれぞれ日本語の「これ」「それ/あれ」に対応するという従来の認識に対し、本稿ではその対応関係が当てはまらない例を提示し、日本語と英語における指示詞の機能の相違点を分析した。

一般的に、話者の近くにある物は this、話し手から離れた物は that で指示するという認識がある。ところが、コミック『ピーナッツ』の英文を観察してみるとこの認識では説明できない用例、つまり話者が手に持っている対象を that で指示していると思われる表現、反対に話者から離れた対象を this で指示していると思われる表現が多く検出される。

そこで、これらの例を収集し考察した結果、that は外界で話者から遠い物を指す以外に、「ある刺激を知覚し反応を表示する the stimulus-response marker としての that」の機能があり、this は外界で話者に近い物を指す以外に、「他者を巻き込み、あるトピックを会話に導入しようとしていることを示す the topic-introducing marker の this」としての機能があるのではないかという仮説を立てた。この仮説に基づき、一見説明できないと思われる this と that の用例をした。

発表 3 (9:35～)

基本動詞(GIVE/TAKE/MAKE)のコアイメージ再考—第 2 のコアから根源的イメージへの展開—

稲垣 亜美 (名市大・日木ゼミ)

近年「GIVE/TAKE/MAKE」といった基本的な動詞のコアイメージは様々な参考書に掲載され、例文を理解する際に有効なものである。しかし筆者には、従来説明されてきたようなコアで理解するには違和感のある例文も少なからず存在するように思われる。それらの例文を考察すると、共通して①無冠詞で動詞的な意味に解釈可能な名詞(vN)と共起していること、②文構造は SVO〔第 3 文型〕だが O が V の目的語と捉えるのに違和感があり、自動詞的な解釈がなされる文があること、といった点が見えてきた。そこで本稿では「GIVE/TAKE/MAKE」に関して、新しい独自のコア〈GIVE＝決定権、TAKE＝必然性、MAKE＝達成〉(第 2 のコア)を提案した。これらのコアを用いることで、従来のコアでは理解しにくかった例文を説明可能にしたと考える。さらに本稿で打ち出したコアは、従来のコアで理解されてきた文に新たな解釈を加えることができると考え、それぞれの動詞における 1 つの根源的イメージを提唱した。

発表 4 (9:55～)

【感情形容詞 + to 不定詞】における動詞のアスペクト解釈のメカニズム

大谷 綾佑 (名市大・日木ゼミ)

英文法において〈to + 動詞の原形〉の形をとり、文中で名詞・形容詞・副詞の役割を果たす用法を to 不定詞という。一般的に to 不定詞は未来の解釈を引き起こすとされている。しかし一部の用法において未来志向が当てはまらない場合がある。その用法の 1 つは、I'm so happy to hear that. (それを伺ってとても幸いです) のように〈感情を表す形容詞 + to 不定詞〉で表され、to 不定詞の副詞的用法の中でも感情の原因と呼ばれる。文法書ではこの用法は過去の解釈を引き起こすと記述される。しかしながら、中には過去解釈で説明が出来ない例文があることに疑問を抱いた。そこで、本稿では感情の原因を表す副詞的用法の例文を完了・進行・未来の 3 つのアスペクトに分類することで、以下のように不定詞内の動詞がアスペクトを決定する要因であるという仮説を立てた。[非活動動詞の場合は完了アスペクト]・[継続的状态を表す状態動詞の場合は進行アスペクト]・[活動動詞の場合は未来アスペクト]。最後に、全体の議論を踏まえた上

で、hear, see, find といった非活動動詞が過去解釈を引き起こす原因について、to 不定詞の時間的方向の観点から考察を行った。

発表 5 (10:10~)

接続詞の用法イメージの図式化 when, but, while, as
大山 巧成(名市大・日木ゼミ)

㊦ I was reading a newspaper when my brother came in.

「新聞を読んでいると兄がはいてきた」

における、when。

そして、

㊧ She speaks very good English – but then she did live in London for ten years.

「彼女はとても上手に英語を話す、だってロンドンに 10 年間住んでいたからね」における、but then の使い方。

これらはいずれも、日本語訳を見て筆者が使いづらいと感じた接続詞である。これらの用法は、一般的な when や but の用法とは異なる部分がある。その部分とはいったいどのようなもので、ネイティブはその用法をどのように考えて使っているのか疑問に感じた。

筆者はまず、一般的な用法との違いを明示するとともに、ネイティブの思考を想像し、図式化してみた。

㊦の when は、【突然の遮断】を表し、時間幅のある行為が突然遮断されてしまうと考えた。また、㊧の but then は、【推測の抑止】を表し、ある事象から自然とされうる推測を押しとどめていると考えた。これらはいずれも、一般的な when, but の用法とは違ったイメージになると思われる。

また、when の研究を進める中で、時を表す接続詞: while, as との使い分けをどのように行うのか疑問に感じた。そこで筆者は、図示を通して時を表す接続詞の類義語比較を試みた。

発表 6 (10:25~)

「B の A」の英訳 —「ベニスの商人」と「パリのアメリカ人」—
片山 裕揮 (名市大・日木ゼミ)

日本語の「B の A」という表現を英訳する際、しばしば前置詞を用いて“A prep. B”と表すことがある。その際用いられる前置詞は様々あり、同じような名詞の組み合わせでも選択される前置詞が違うことがある。例えば「パリのアメリカ人」と「ベニスの商人」はどちらも場所と人を「の」で結んでいるが、原題はそれぞれ “An American in Paris”、“The Merchant of Venice”となっており、異なる前置詞が用いられている。

また、和英辞典の「の」の項目を見ても、用法ごとに前置詞が決められているわけではない。これは日本語の助詞「の」の利便性によるものだと考えられるが、これらの日本語を英語にする際は前置詞をどう選択したらよいのだろうか。

本稿では A を「人物系」「理由・原因系」というように的を絞ってコーパスや辞書の例文を取り上げ、A と B の関係性と各前置詞の性質から英訳する際使われる前置詞の選び方を明らかにしようと試みた。その結果、いくつかのパターンごとに規則性があることがわかった。

発表 7 (10: 50～)

be 動詞+α の意味を持つ動詞—イメージの違いで選ぶ LIE 系, REMAIN 系, SEEM 系—

田中 美穂 (名市大・日木ゼミ)

第2文型(SVC)は S=C という関係を表しており、「S は C である」という基本的な意味を持っている。第2文型で使われる動詞は連結動詞(Linking Verb)と呼ばれ、その代表的なものは be 動詞であるが、ほかにも stand, lie, sit, remain といった様々な動詞がある。筆者は、辞書で“I stand ready for anything.”「何が起ころうと覚悟ができています」という文を見つけた。この文の動詞を be 動詞に変えて“I am ready for anything.”としても意味は通るが、stand を使うことで be 動詞を用いる場合とは異なる+α の意味が付与されるのではないかと考えた。本稿の目的は、連結動詞のグループを3組取り上げ、各動詞がどのようなイメージを持ち、それによってどう使い分けがなされるかという点を明らかにすることである。英語学習者がこの点を理解して SVC 構文の表現の幅を広げられるよう、辞書やコーパスを用いた調査を基に、各動詞の+α の意味として以下を想定し、イメージ図を提案した。

- 「...の状態である」系: LIE「休んでいる」、SIT「何もせずにじっとしている」、STAND「いつでも活動できる状態」
- 「...のままである」系: REMAIN「変化を促す要因があっても、元の状態にとどまっている」、STAY「信念や考えに基づき、自らの意思で元の状態にとどまっている」、KEEP「何らかの努力によって状態を維持している」
- 「...のようである」系: SEEM「頭の中の情報を基に思考する」、APPEAR「(中身はどうか分からないが)外見はそう見える」、LOOK「顔の表情や雰囲気に基づく直感的な印象」

発表 8 (11: 05～)

know を使い切る為の語法研究～「know=知っている」を超え

寺尾 優里 (名市大・日木ゼミ)

本研究では、単純に見えて実はよく分かっていない単語“know”を使い切る為、“know”を状況に応じて適切に使う方法の提示を目指した。ロングマン英英辞典で know を引くと、1 番目の意味として to have information about something [intransitive, transitive]と出てくる。そこには、know+N / know+of+N / know+about+N 等の構文が、違いの説明も無く同じ意味として羅列されている。また、会話表現において、“I know. / I know it. など決まり文句としての使用方法も非常に多く、ほとんど似たような表現であるが、どのような状況で使い分けしているのか明確でない。これらの理由から、日本人が know を使いこなすには非常に分かりづらい辞書の記述になっていることに気がついた。そこで筆者は、have information の意味における know の例文を考察し、構文別に体系化した仮説を提示する。

発表 9 (11: 20～)

副詞的に訳してしまう 3 表現の研究:「素直な-ly 副詞」、「副詞的 at 前置詞句」、「非副詞的 in 前置詞句」

湊 真穂 (名市大・日木ゼミ)

英語では、同じ単語を用いて副詞を表現する場合、その単語に-ly を付ける-ly 副詞表現と、前置詞の後に単語を置く前置詞句表現が存在している。-ly 副詞と前置詞句はいずれも副詞的に訳されることが多い。例

例えば、most を副詞化するには、mostly と at most の 2 種類の方法が考えられる。この場合、mostly は「たいていは」と訳され、at most は「せいぜい」と訳される。また、earnest を副詞化すると、earnestly と in earnest となる。この場合、earnestly と in earnest は共に「真剣に」と訳される。ここで、mostly と at most のように異なる日本語訳が与えられる場合、なぜ同じ most という単語を用いているのに異なる日本語訳になるのか、また、この 2 種類の表現はどのように異なるのかという疑問が生じた。また、earnestly と in earnest のように同じ日本語訳が与えられる場合は、本当に同じ意味になるのかという疑問が生じた。そこで、-ly 副詞と at 前置詞句、-ly 副詞と in 前置詞句を比較し、どのような相違が存在するのか、なぜ相違が生じるのか、ということをも明らかにすることを試みた。

考察の結果、-ly 副詞は形容詞が素直に副詞化されているが、at 前置詞句で表す場合は副詞の種類によって 2 パターンの意味の特化(1. 限界値の設定、2. 状況の変化)が存在すると分かった。また、-ly 副詞が動詞を修飾しているのに対し、in 前置詞句は主語を叙述していると分かった。最後に、それぞれの副詞、前置詞句の仮説を述べることで、-ly 副詞と前置詞句のニュアンスの違いを提示した。

発表 10 (13: 00～)

A STUDY OF POLITE EXPRESSIONS IN ENGLISH

筒木 康亮 (三重大学・西村ゼミ)

この論文で主に扱うものは英語の丁寧表現である。

初めに、1 章では英語におけるポライトネス(丁寧なこと)の概要としてポライトネスとは何か、なぜ生じるのか、またその 2 分類について考えた。

2 章では語用論の観点からポライトネスに光を当てた。ポライトネスの主なストラテジーとされる間接発話行為を通じて話者の心理について考察した。また、この分野ではどういった文法事項が主に用いられるのかその理由と共に論じた。

3 章では社会語用論の観点からポライトネスを扱った。ここでは、人間社会においてどういった要素が丁寧さを決めるための社会通念を形作っているのか、また日英言語を比較し、丁寧とされるものとそうでないものの差異に関して考えた。

4 章ではケーススタディーを行った。実際のポライトネスの利用を、2020 年の米大統領候補者討論会とある映画を通じて考察した。

5 章では高校教育におけるこの分野のより良い扱い方について考えた。現行の教材をもとにその改善点を考え、より良い指導方法を提案した。

発表 11 (13: 15～)

A STUDY OF GERUNDIVE AND INFINITIVAL CONSTRUCTIONS

稲葉 莉子 (三重大学・西村ゼミ)

この論文の目的は高校生に動名詞と to 不定詞の違いの教え方を考案することである。初めに動名詞、もしくは to 不定詞をのみ従える動詞について、歴史的変遷と、先行研究を調査した。さらに両者を取り得る動詞(remember 等)の意味の違いについて述べた研究についても取り上げた。まず歴史的観点から見ると、動名詞は抽象概念を表すものであり、一方で to 不定詞は前置詞 to が方向等を表していたことから、「とある行為に向かっていく」様子を表すことが分かった。先行研究では動名詞は「継続を表す」「行為を単

なる出来事としてとらえる」「事実を表す」と述べていることが分かった。to 不定詞については「まだ起きていないことに言及する」「不確定なことを表す」「話者の意識の方向を表す」等の意見が述べられていた。これらのことから私は「動名詞は主語から時間的/物理的に近い行為を表す」「to 不定詞は主語から離れている行為を表す」と考えた。

発表 12 (13: 30～)

A STUDY OF PARTICIPIAL CONSTRUCTIONS

加納 澤 (三重大学・西村ゼミ)

分詞構文とは、副詞的な役割を持つ句を、現在分詞(-ing)や過去分詞(-ed/ -en)の形で動詞を使うことによって表す構文である。分詞構文では、時や理由、譲歩など様々な意味を表すことが出来るが、曖昧さがあり、形式的な書き言葉でしか使われないとされてきた。それ故、コミュニケーションを重視する学校教育ではあまり重要視されてこず、副詞節への書き換えによる指導が続いている。だが、この指導法では、特定の接続詞を用いた副詞節への書き換えができない付帯状況の説明をすることは出来ない。しかし、分詞構文の中で最も頻繁に使われているのは付帯状況の用法であり、小説や新聞、科学雑誌を調べても多くの例文を見つけることが出来た。そこで、高校生が分詞構文を正しく理解し、英文の中で読解できるようにするための指導方法として、適切な到達目標を定めること、分詞構文の定義づけと同時性を軸とした説明、取り扱う例文の工夫、演習の方法について考えた。

発表 13 (13: 45～)

A STUDY OF PHRASAL VERBS IN ENGLISH

矢野 元生 (三重大学・西村ゼミ)

この論文は単なる「自動詞＋前置詞」と句動詞(群動詞)の違いを明確にすることに重きを置いた。第1章では句動詞の定義や代表的な語句を紹介し、構造の違いを明確にするために受動態における文の正誤の確認をした。ここで、統語上の問題で句動詞は受動態になれるが、「自動詞＋前置詞」が受動態になれないという考えが出てきた。しかし、「自動詞＋前置詞」の形でも場合によっては受動態で用いることができることがあり、その例外を文を用いて説明をした。第2章では他動詞と自動詞の違いについて触れた。また、他動詞と自動詞の分類の中で出てきた、「他動詞＋前置詞」の形で用いられる動能構文について詳しく述べた。第3章では第1, 2章の結果を踏まえて、もう一度それぞれの定義を確認した。また、動能構文が受動態になれるかどうかの確認をした。そして、この結果をもってこの論文を結論へと結び付けた。

発表 14 (14: 10～)

HOW TO TEACH ENGLISH AT ELEMENTARY SCHOOL FROM A VIEWPOINT OF CROSS CURRICURUM LEARNING

井上 晋作 (三重大学・中川ゼミ)

日本人は英語能力に問題があると言われている。そうした問題に対応すべく、小学校の英語教育は見直されている。とはいえ、まだまだ問題があるとも言われている。本研究は、そうした状況の中で、小学校

の英語教育に一つの可能性を提供するものである。本研究では、CLIL をベースとした教科横断型の授業法を提案する。教科横断的に学ぶことによって、英語が苦手を感じる生徒が、さまざまな文脈で自然に英語にふれることができる。さらに、本研究は、ただ CLIL を用いて英語教育を行うのではなく、いくつかの理論 (active learning, scaffolding, taxonomy, learning assessment, metacognition, and meaningful learning) を用い、行う活動を理論づけ、また、CLIL 自体の問題点を改善するものである。ただし、本研究では実戦に至っておらず、有効性に関して、確証は得られていない。また、理論的にもいくつかの限界点がある。ただし、先行研究との整合性からも、一つの可能性としては価値のあるものだと考えられる。この研究に関しては、本論文にとどまることなく、この先、実践し、あらゆる他教科との統合にも踏み込み、効果を検証し、改善していく必要があるだろう。

発表 15 (14: 25～)

**A METHOD OF TEACHING ENGLISH WORD ORDER AT ELEMENTARY SCHOOL:
WITH SPECIAL FOCUS ON SVO CONSTRUCTION**

下里 あおい (三重大学・中川ゼミ)

本稿では、小学校外国語科の授業において、文法指導の中でも特に語順指導に注目した効果的な指導法を提案する。

2020 年度から新学習指導要領が施行され、3・4 年生で外国語活動、5・6 年生で外国語が正式な教科となった。外国語科における文法指導に関しては、学習指導要領によると「文法の用語や用法の指導を行うのではなく日本語と英語の語順の違い等に気付きを促す」との記述がある。効果的な語順指導法を考えていくうえで、現在出版されている 7 社 14 冊の教科書を調べたところ、第 6 学年で 5 文型のうち SVO 型が一番多く登場していることが分かった。このことから本稿では第 6 学年を対象とし、SVO 型に焦点を当てた指導法を述べていく。また「気付き」についても先行研究を踏まえて述べていく。Flavell (1976, p. 232) は metacognition を “one’s knowledge concerning one’s own cognitive processes and products or anything related to them, e.g., the learning-relevant properties of information or data.” と定義していることから、methodology では「気付く」という言葉を避けて、児童による自然な気付きを促すことを大切にしたい指導法を提案する。さらに独自の methodology から予想される結果や考察、それを基に限界点や改善点について先行研究と関連付けながら述べていく。

本稿が今後の小学校英語語順指導に少しでも役立てば幸いである。

発表 16 (14: 40～)

**THE STUDY OF TEACHING WORDS IN ENGLISH
USING AUDIOVISUAL MATERIALS AT ELEMENTARY SCHOOL**

西口 詩乃 (三重大学・中川ゼミ)

society 5.0 時代の到来や 21 世紀型スキルの必要性が注目されている現代において、ICT の活用は、今後必要不可欠なものであり、その中でも子供達自身が ICT スキルを身につけることが重要であると考えられる。

この論文は、自己決定理論、多重知能理論などの先行研究を基に、ICT を含む視聴覚教材の特性を明ら

かにしながら、小学校における1人1台のタブレット端末の利用を前提とした英単語指導法を提案するものである。

ICTを活用した本研究での活動を取り入れることで、学習者の自由な選択肢を最大限可能にし、得意不得意などの個人差への対応が期待できる。更に学習内容をデータ化し、ポートフォリオとして用いることが可能となることで、学習を経年比較・評価することができる。

これらの活動での特徴を根拠に、本研究では、ICTの活用によって学習者中心の英単語学習が可能になることを論証していく。